

(東京都ひきこもりに係る支援協議会) 第3回支援協議会 レジュメ

ひきこもりUX会議
代表理事 林 恭子

コロナ禍のひきこもり当事者の現状と課題

【当事者の現状】

誰もが家にこもらざるを得ない状況が作られたことにより少し気が楽になったという当事者がいる一方で、ひきこもり当事者会や居場所が開催できないことで、最初の一步を踏み出した当事者たちの行き場がなくなっている。

さらに、アルバイトや仕事を始めた人たちがコロナの影響で休職や失職に追い込まれ、再びひきこもってしまった、などの声も聞いている。

家族と接する時間が増えたことにより会話が増えたという話もある一方、在宅勤務の家族との軋轢やプレッシャーが増え、自宅に安心して居られなくなっている当事者もいる。

また、オンラインでも「つながりを」との声が大きく、誰にもどこにもつながれない自分に対する自責感や罪悪感が強まったとの声もあった。

【当事者会・居場所の課題】

オンライン当事者会を立ち上げる人たちも出てきており、遠方であったり外出ができない当事者が参加しやすいなど、概ね好意的に受け入れられている。

一方でネット環境が整わなかったり、運営する上での困りごとを相談できる人がいないなど課題も出てきている。

また、自粛が長引く中でリアルな居場所の開催を望む声も増えてきている。

その際の課題として、感染予防として定員を制限することにより参加費は減収となるが、公共施設の多くは使用料の減免措置等の対応がないため、財政的な問題から開催が困難になるという状況も起きている。

【要望】

自粛生活が長引く可能性があることから、ひきこもり相談については家族も含め電話、オンライン、メール、手紙等、対面に限らない方法の充実を希望したい。

また、パソコンの支給やインターネット環境の整備、居場所運営などについて相談ができる窓口の設置も望まれる。

最後に、コロナ禍により居場所や当事者活動の中断を余儀なくされ、人と出会い、対話できる機会を失っていることから、再びひきこもりの状態へ戻ってしまうのではないかという不安が当事者にも広がり始めている。

ひきこもり支援は、長い時間をかけて根気強く信頼関係を築いていくことが重要であり、ようやくたどり着いた支援やつながりが途切れてしまうことがないよう、これまで以上に「切れ目のない支援」を強く要望していきたい。